

「母なるもの」と心理療法

環境人間学部 井上 靖子



キーワード

元型的イメージ、容器、心の変容、二度生まれのセラピー

研究概要

本研究では、Jung, C.G.が心の深層にあると指摘した太母元型(母なるもの, the great mother)を取りあげ、心理療法における「母なるもの」のイメージの治療的意義について考察を深めていくことを目的としている。ここで、Jung, C.G.(1954/1982)が探究した「元型」(Archetype)とは、「生得的で、ア・プリオリ(先験的)に与えられている表象形式の可能性」であり、人類普遍の集合的無意識を構成する概念である。したがって、「元型それ自体」を意識で捉えることは難しいが、人が行動に向かうときに無意識的な磁場として働き、人間の意識には、心象や象徴的イメージとして把握される。これらの元型的イメージは、相反する2つの性質が二律背反的に同時に存在する両義性を持ち、根源的で太古的な性格を有している(Jung, C.G., 1921/1987)。特に、「母なるもの」のイメージのうち、中心的象徴である、生死一如、生成と破壊を内包する「容器」(vessel)イメージに注目する。本研究では、イメージの内容だけではなく、その働きに着目し、心理療法の過程におけるその治癒力を明らかにする。そして、「母なるもの」のイメージを生かした心理療法を「二度生まれのセラピー」と命名し、クライアントの心身の変容を促進するのが、「母なるもの」の両義性のイメージであることを、事例研究を通して、考察を深めていく。

アピールポイント

これまで、20年近く、福祉、医療、教育の様々な臨床現場で、心の傷つきを抱えた人々の心理療法の実践に携わってきた。実際に、人々の心が変わったり、癒されたりする現場に立ちあい、具体的事例をもとに、母なるものの容器イメージが重要であることを明らかにした。

応用分野

虐待、暴力、災害などのストレスによって、存在基盤が揺らいでいる人々の心理支援、子どもや高齢者、子どもと保護者の居場所づくり、絆づくりを目指した地域臨床活動を支えるコンセプト、基本的信頼感、自己肯定感を育むための個人またはグループセラピーの創造